平成22年度KANAME研究集会in沖縄参加報告

比名祥子
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻
修士課程

もうはるか昔の出来事のように感じますが，今年の２月ごろ，研究集会で沖縄に行けることを私たち学生は無邪気に楽しみにしていました．研究発表用のポスターをギリギリまで踏ん張って仕上げ，あとは思いっきり沖縄ではじけるだけだ，と思いガイドブック片手に快晴の東京を飛行機で飛び立ったのが３月５日の早朝．たくさんの思い出と，ふつふつと沸く研究意欲，充実感と等価な疲労感いっぱいに帰りの飛行機に乗ったのが３月９日の夜．そのときは，まさかそのすぐ２日後に東北地方太平洋沖地震が発生し，地球科学を学ぶ学生としても，東京に住む１市民としても，不可逆の歴史的事件に遭遇することになるとは夢にも思いませんでした．３月11日を境に，日本は色々なことが決定的に変わってしまいました．今回の研究集会参加報告は，before shockの言わばまだ日本が無邪気だった頃の話です．そのことを念頭に置きつつ，ご報告したいと思います．

KANAME研究集会とは，2009年度から始まった新学術領域研究，『超深度掘削が拓く海溝型巨大地震の新しい描像』（KAkenhi for NAnkai Megathrust Earthquake; 略称KANAME）に参加する研究者，及び学生が集う，今年第2回目となる研究集会です．総勢70名が参加し，３月６日に沖縄四万十帯巡検，３月７日～８日に研究集会を行いました．

沖縄四万十帯巡検

四万十帯と言えば紀伊半島，そして四国の露頭しか経験のなかった私としては，九州からさらに600kmも離れた土地での巡検にとてもわくわくしていました．筑波大学の氏家恒太郎先生の案内で１日かけて沖縄本島北東部，名護市の東縁の長大な海岸線沿いの露頭を巡検しました．そのあまりにダイナミックで美しい産状に，私の軽薄なわくわく感はすっかり凌駕され，ただただ終始感嘆のため息ばかりついていた気がします．

沖縄本島四万十付加体は，九州から台湾まで約1,200km続く琉球弧の真ん中に位置し，プレートの沈み込みに伴い，海溝を充填していた堆積物層がはぎ取られ大陸プレートに付加することで形成され，その際にできた大規模な褶曲構造や断層変形を観察することができます．新第三紀以前の沖縄本島の基盤は岩層，構造，年代から北東－南西方向に配列する４つの地帯に区分され，私たちはその中で最も東側にあたる嘉陽層（始新世タービダイト層）を巡検しました．特筆すべきは露頭の規模の大きさと，産状のよさです．私が今まで見てきた紀伊半島や四国の四万十帯は，風化の度合いが激しくまた露頭の大きさも小規模で，大構造を観察することが難しかったのですが，今回見学した露頭は高さ30mもの岸壁に大規模なキンク褶曲や衝上断層群などが観察でき，まるで日本ではないような圧倒的な露頭の存在感に驚きの連続でした．

また，私にとっては久しぶりの大人数での巡検で，みんなとわいわい言いながら快晴の空の下，飽きることなく大自然を満喫するとてもよい機会になりました．特に今回は地質系に限らず広く様々な分野の方々とご一緒できたので，同じ露頭を見るにしても多様な捉え方があることを改めて学びました．あちらこちらで自然発生的に少人数が集まって様々な議論が飽きることなく展開される，という贅沢で稀有な空間は本当におもしろく刺激的で，とても勉強になりました．

四万十帯は，自分自身卒業研究で対象とした思い入れのある地帯です．今回沖縄の青すぎる空の下，四万十帯の新たな一面を観察することができ，私にとってはかけがえのない経験となった一日でした．

話は少し飛びますが，私は元々文系の出身で現代思想を学んでいた時期があり，沖縄の地へは，平和学習の観点から研究室の合宿で何度か足を運んで来ました．人文科学の側面から見た場合の「沖縄」は，１に第２次世界大戦での唯一の日本本土決戦の場として，そして２に今なお日米安全保障の狭間で米軍との共存にゆれる地として認識されます．私も以前政治学科の学生として沖縄に来た際は，自分の祖母や祖父の生きた時代としての過去と，自分や，自分の子供が生きる時代としての未来を両端にした定規を持って沖縄を見ていました．そこで見た沖縄は，底抜けな南国の明るさの内に，歴史の底に疼く悲哀と，米軍という暴力に反発しつつも構造化せざるを得ないやるせなさを抱えていて，これからの自分に直結する生きた問題が強烈に提起され続けている場所でした．しかし今回自然科学の側面から沖縄を見たとき，その様相はあまりに違っていて，初めは同一の対象として意識に上ることすらありませんでした．ここで本質的なのは，使う定規の大きさの違いです．人間活動の単位を100年とすると，今回の話は少なくとも4桁は違うタイムスケールで語られる物語で，悠久の地球の時間の前に，私たち人間の一生は大海の中の１つの砂粒のように埋没し，まるでお話にならないように思えます．しかし，今回の東北地方太平洋沖地震のような大災害は，私たちのちっぽけでささやかな人生にほんの数分の間で多大な影響を与えます．そこに4桁のギャップこそあれ，やはり地球の46億年の歴史と私たち人間の歴史はつながっていて，人文科学の側面から見た沖縄も，自然科学の

写真１　参加者の集合写真

側面から見た沖縄もどちらも同じ沖縄であり，どちらを欠いても本質的な沖縄の理解にはつながらないんだな，という実感を，この巡検を通じて，ゆっくりじんわりと得ることができたと思います．

研究集会

今回の研究集会での宿泊先は，沖縄と言えば海，の土地でなぜか「沖縄で空に一番近い」が売りの山の上のホテルタニューでした．繁華街がはるか眼下で，多くの先生方が飲み屋さんが遠いことを嘆いておられましたが，喧騒から隔絶された静かな環境は，本分である研究集会，という面ではとてもよかったと思います．

研究集会は３月７日と８日の両日，朝は８時から夜は６時までみっちりと研究発表，お昼休憩の間は学生を中心としたポスター発表と，まさに勉強漬けの２日間でした．普段学会の発表では，自分の研究分野や興味範囲の発表に偏って視聴しがちですが，今回は参加者全員が全ての発表を聞く形で，分野横断的に広範な研究内容を知ることができ，大きく視野が広がる契機になりました．私自身もポスター発表を行い，様々な方から多角的な意見を頂くことができて，大きな刺激と励みを得ました．

発表内容はどれも興味深かったのですが，個人的に一番印象的だったのが，京都大学の山田泰広先生の付加体モデル実験のデジタル画像解析です．プレートの沈み込みが進行するに従って，付加体中のスラスト及びバックスラストがどのように形成されるか，またどのように再活動するのかが視覚的にとてもわかりやすく表現されていて，前弧最縁部の断層が活動するのに伴って，一見もう活動が終了したかに見える大陸側の古い断層が突然再活動するなど，断層活動の複雑さを感覚的に非常に明瞭に見て取ることができました．詳しくはKANAME HP（http://www-solid.eps.s.u-tokyo.ac.jp/nantro～/newslwtter.html）のKANAMEニュースレター Vol.２の表紙に写真が掲載されていますので，ぜひご覧ください．

日中の集中した濃密な時間が過ぎ去り，日が暮れてからは一転，研究集会はまったく違った様相を呈しました．地球科学の研究者は総じてお酒好き，という話は方々で聞きますが，ホテルに宿泊した４日間，連続で夜半まで開催される飲み会は，巡検もして，勉強もして，本来なら疲れきっているはずの（特に年配の先生方の）体のどこにそんな元気が残っていたのか，と不思議に思うほど連日大盛況でした．地球惑星連合大会でも連日飲み会が開催されますが，今回は全員が一つ屋根の下に泊まっているということもあり，テンションも最高潮だし時間もエンドレス．ついに最終日には，ビール専用の大きな自動販売機を空にし，ホテルの従業員の方に頼んでレストラン用の瓶ビールを提供してもらう，という騒ぎにまでなりました．かく言う私もたくさんお酒をいただいたので人のことは言えませんが，あくまで節度ある範囲で，数少ない女子学生同士で楽しく交流を深めました．沖縄と言えばオリオンビールの他に泡盛も有名ですが，アルコール臭のきつい泡盛は苦手な方も多いと思います．しかし，そんな泡盛も長期間熟成させるとまろやかになり甘みが出るということを初めて知り，宿泊中，おいしい泡盛の古酒を色々と飲ませていただきました．沖縄に行かれる際はおすすめです．

おまけ

以上のように休む暇なく活動しているうち，４泊５日の日程はまたたく間に過ぎ去り，研究集会は大団円のうちに終了しました．最終日の朝はみなさん連日の議論と深酒で疲労困憊の表情で，とりあえず連合大会での再会を約束しつつ，めいめい帰路につきました．そんな中，私の属するKANAME代表の，木村学先生の研究室のメンバーは，飛行機が発つまでのわずかな間ですが沖縄を観光しました．やはり沖縄と言えばビーチです．その日も南国特有の底無しに青い快晴の空の下，閑散期で人もまばらなビーチにお邪魔し，どこまでも透明なコバルトブルーの海に足をひたして存分に水遊びをしました．疲れた後はビーチにあるレストランでお昼ご飯を食べたのですが，設置されたテレビを見ていると，ふと地震速報が流れました．宮城県沖震源M7.3，最大震度５弱の地震，東北太平洋沖地震の前震でした．私たちはごはんを食べながらのんびりと，このニュースを見て，「震源が浅いね」などぼんやりと２，３会話を交わしました．それが２日後に起きる日本近代史史上最大の大災害の前兆であったことを考えると，何気ない日常の下，私たちの全く与り知らないところで地球は着実に活動し続けているのだな，と思いました．

写真２　巡検の様子

思い返してみると，兵庫県南部地震のときもそうでした．1995年，私は小学生で西宮市に住んでおり，震度７の激震を経験しました．地震前日の１月16日は祝日で，私は次の日の学校の宿題をやらないままふとんに入り，夢うつつな中で，「ああ，明日学校なんかなかったらいいのに」と思っていたことを今でもはっきりと覚えています．そうしたところ，次の日その希望は壮絶な形で叶いました．自然の前で人間はどうしようもなく無力で，何気ない日常は突如として圧倒的なエネルギーの前で断絶されるという現実をそのとき肌身で感じてから今，沖縄の研究集会と東北地方太平洋沖地震を経て，自分が研究する意味について，もう一度真剣に考えてみたいと思っています．

以上，すっかりつれづれなるままに関係のないことまで好き勝手書いてしまいましたが，これだけのことを考えてしまうほど，今回のKANAME研究集会in沖縄は私にとって有意義すぎる機会でした．この場をお借りして，そのような貴重な機会を与えてくださった木村先生を始めとしたすべてのみなさまにお礼を申し上げます．本当にありがとうございました．以上で研究集会報告を終わりたいと思います．

常時投稿をお待ちしています．院生コーナーの編集は現在以下の４名でおこなっています．原稿はe-mailでいただければ幸いです．

k1799462@kadai.jp　中谷大輔（鹿児島大）
b.honda@ruri.waseda.jp　本田豊也（早稲田大）
yhamada@eps.s.u-tokyo.ac.jp　濱田洋平（東京大）
gsc421511@s.okayama-u.ac.jp　湯川弘一（岡山大）